

コノリ遺跡群 4

—第6次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1075集

# コノリ遺跡群 4

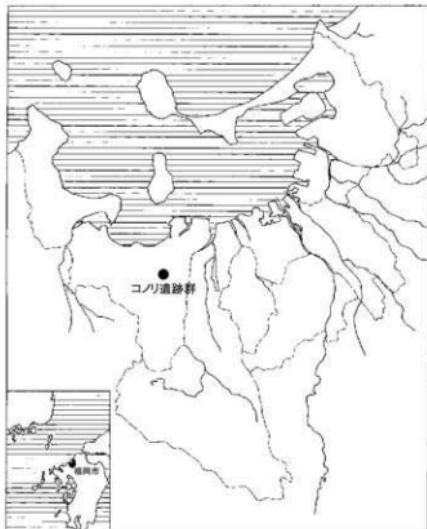
—第6次調査の報告—

2010

福岡市教育委員会

# コノリ遺跡群 4

—第6次調査の報告—



遺跡番号 KNR-6  
調査番号 0819

2 0 1 0

福岡市教育委員会

# 序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります。開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめています。

本書で報告するコノリ遺跡群は、早良平野の西縁、十郎川の西岸に位置する低丘陵上に展開する遺跡です。古くから群集墳や製鉄関連遺跡として知られていきましたが、これまでの発掘調査で弥生時代の一大集落の存在なども明らかになっております。

今回報告する壱岐小学校内の第6次調査では、弥生時代の集落と奈良時代前後の建物群や製鉄関連遺物などがみつかり、コノリ遺跡群の具体的な歴史的変遷を明らかにする資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会  
教育長 山田裕嗣

## 例　　言

1. 本書は壱岐小学校（西区拾六町3丁目21-1）敷地内の校舎増築に先立って福岡市教育委員会が実施したコノリ遺跡群第6次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は森本幹彦が担当した。遺構、遺物の実測、撮影、製図は森本が行った。
3. 出土した鉄滓の整理においては長家伸氏（埋蔵文化財第2課）のご教示を得た。
4. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。この座標により調査区周辺の測量を行い、道路地図に合成している。本書で用いている方位記号は全て磁北で、真北より $6^{\circ} 21'$ 西偏している。
5. 遺構の略号は、堅穴住居址をSC、掘立柱建物をSB、井戸を含む土坑をSK、柱穴等をSPとしている。
6. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

コノリ遺跡群	第6次調査	遺跡調査番号	0819
地　　番	福岡市西区拾六町3丁目21-1	遺　　跡　略　号	KNR-6
分布地図番号	91　橋本	調査面積	275m <sup>2</sup>
調　　査　期　間	2008(平成20)年7月1日～7月20日		

# 本文目次

I.	はじめに	1
II.	遺跡の立地と環境	1
III.	調査の方法と経緯	2
IV.	調査の概要	7
V.	弥生時代の遺構	8
VI.	古代の遺構	10
VII.	出土遺物	16
VIII.	まとめ	23

# 挿図目次

Fig.1	コノリ遺跡群と周辺の遺跡分布 (1/25000)	0
Fig.2	コノリ遺跡群の調査地点 (1/5000)	3
Fig.3	明治33年の地形と調査地点 (1/8000)	3
Fig.4	壱岐小学校内の調査 (1/500)	4
Fig.5	第6次調査の区割り (1/200)	4
Fig.6	調査区全体図 (1/80)	5・6
Fig.7	第6次調査の主な遺構と等高線 (1/120)	7
Fig.8	AB ライン土層図 (2区 SC 2周辺 1/40)	8
Fig.9	CD ライン土層図 (3区 SK 1周辺 1/40)	8
Fig.10	EF ライン土層図 (1区 1/40)	8
Fig.11	SK 1 実測図 (1/40)	9
Fig.12	SC 1 実測図 (1/40)	10
Fig.13	SC 2 実測図 (1/40)	11
Fig.14	SC 3、4 実測図 (1/40)	11
Fig.15	SB 5、7 実測図 (1/40)	13
Fig.16	SB 6 実測図 (1/40)	14
Fig.17	SB 8、9 実測図 (1/40)	15
Fig.18	216実測図 (1/40)	16
Fig.19	SK 1 出土の弥生土器 (1/4)	17
Fig.20	各遺構出土の弥生土器 (1/4)	18
Fig.21	各遺構出土の古代の土器 (1/4)	19
Fig.22	2区包含層出土の土器 (1/4)	19
Fig.23	3区包含層出土の土器 (1/4)	20
Fig.24	近世溝、搅乱等出土の土器・陶磁器 (1/4)	20
Fig.25	石器 (1/2、1/1)	21
PL.1~7		24~30



Fig. 1 コノリ遺跡群と周辺の遺跡分布 (1/25000)

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

2007年10月1日付け施設第637号で、福岡市教育委員会総務部施設整備課より福岡市西区拾六町3丁目21-1地内、すなわち福岡市立壱岐小学校敷地内における校舎増築にともなう埋蔵文化財の事前審査について依頼文書が提出された。申請地が周知の遺跡であるコノリ遺跡群の範囲内に位置することと隣接地の調査成果（調査番号0518、2006年5月16日～6月14日実施）から対象地内に遺構が存在することは明らかであった。

埋蔵文化財第1課と施設整備課で協議を重ねた結果、基礎が遺構面を破壊する建物の建設予定部分について記録保存のための本調査を実施することとなった。調査は2008年4月着手の予定であったが、3月に設計の再検討と計画の見直しがあり、調査は延期されることとなった。計画が固まり、調査に至ったのは7月である。

発掘調査は2008年7月1日～2008年7月20日に、建物建設予定地全体の275m<sup>2</sup>について実施した。調査期間中は既存建物の耐震工事と併行しており、また小学校の学期期間中であったため、重機や大型車の作業には、関係者との協議を経て慎重に行程を組む必要があった。整理作業と報告書の作成は平成21年度に行なった。

発掘調査の実施にあたっては、当教委施設整備課、並びに壱岐小学校の先生、生徒、ご父兄の方々、工事関係者をはじめ関係者の方々に多大なご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝いたします。

### 2. 調査組織

**事業担当** 福岡市教育委員会総務部施設整備課

**発掘調査** 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課 課長 田中寿夫

調査第1係長 杉山富雄

**庶務担当** 文化財管理課 管理係 古賀とも子 井上幸江（前任）

**事前協議** 埋蔵文化財第1課 事前審査係長 宮井善郎 吉留秀敏（前任）

事前審査係 阿部泰之 星野恵美（前任）

**調査担当** 埋蔵文化財第2課 調査第2係 森本幹彦

## II. 遺跡の立地と環境

コノリ遺跡群は早良平野の北西部、十郎川西岸の高位段丘面の丘陵上に位置する。丘陵は早良平野の西を画する叶岳から北に続く山塊の北東部に当たる。その山塊を抜けて今宿平野に通じる広石峠からはそう離れておらず、古代の額田駅や官道にも近接する要衝の地と考えられる。早良平野に位置する遺跡であるが、糸島とも関係の強い地域と考えられるので、Fig.1には室見川西岸地域から今宿平野の遺跡分布を示した。

遺跡群周辺は昭和30年代の拾六町団地造成に伴う開発などで地形の変更が著しく、6次調査地点の壱岐小学校周辺も、明治時代からの小学校造成などにより、本来の自然地形が分からなくなっている。これまでの調査成果や明治時代の地図（Fig.3）から、コノリ遺跡群内には北東に伸びる狭い丘陵尾根筋が複数走っており、6次調査地点は3次や4次調査地点とは異なる尾根筋の先端付近に位置している。かつては、コノリA～C遺跡やコノリ製鉄A～D遺跡のように細別されて遺跡登録されてい

たが、どの地点も複合遺跡であり、実体に合わないことから、「コノリ遺跡群」と一括してとらえるようになっている。

コノリ遺跡群は丘陵尾根上の削平が著しく、これまでの調査では尾根斜面や谷部を中心に遺構や遺物がみつかっている。それらの概要については一覧表の通りである。1次調査の詳細が不明であるが、①弥生時代中期後半から後期末の集落、②古墳時代後期の集落と群集墳、③周辺で製鉄を行う奈良時代前後の集落、これらが遺跡群の主体となっている。

①は遺跡群全体に分布していたとみられるが、本調査区周辺は中期後半前後が主体で、尾根筋が異なる4次調査周辺は後期以降が主体である。尾根斜面～谷部でみつかる遺構密度からみて、当該期には一大集落を形成していたと考えられる。周辺の野方遺跡群や吉武遺跡群などに比べると、マイナーであるが、この地域の弥生時代集落を考えるうえで不可欠な遺跡である。3次調査では楽浪系土器が出土しているが、早良平野ではここ東入部遺跡の2遺跡でしか出土していないことからもその重要性をうかがうことができる。

②は3次や4次調査区周辺に集落が形成され、遺跡群西部の標高の高いところに古墳群が分布するとみられる。当該期のこのような方は早良平野や糸島では珍しいものではない。一方、本調査区周辺では遺物もほとんどみつかっておらず、この前後の時期が希薄である。

③は遺跡群全体に分布していたとみられ、鉄滓や炉壁の出土から各所で製鍊や鍛冶が行われていたと考えられるが、製鉄関連遺構については製鍊炉の可能性のあるものが1基と製炭用の焼土坑が1基みつかっているにすぎない。糸島～早良平野に多くみられる古代の製鉄関係遺跡の一つである。生産の中心は志摩地域にあり、その不足を補う衛星的な製鉄遺跡とみられる。これらの製鉄遺跡は怡土城との関係や有田遺跡群と金武地区の官衙遺跡との関係が注目されるところである。

### III. 調査の方法と経緯

調査区はFig.5のように1～5区に分けた。調査だけなら、排土を置くスペースが十分あり、一度に全面を調査することは可能であったが、同時に始まった耐震工事のトラックや機材を移動するスペースを確保するため、以下のような経緯で調査を行った。

7月1日に機材搬入と1～3区の表土剥ぎを行った。1区と3区の間、2区と3・4区の間には既コノリ遺跡群調査一覧

次数	調査年度	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	調査概要	報告書番号
1	1973		宅地造成	コノリ古墳群A群、B群の古墳8基ほか	日本大学調査未報告
2	1986	360	公民館改築	奈良時代の掘立柱建物、溝、鉄滓	162
3	1998	1500	共同住宅建設	縄文時代の落し穴、弥生時代後期の土坑、楽浪土器、古墳時代後期の土坑、奈良時代の製鍊炉？鉄滓、戦国時代の井戸、溝	728
4	2004	2025	共同住宅建設	旧石器、縄文時代の落し穴、弥生時代後期の堅穴住居、土坑、古墳時代後期の堅穴住居、掘立柱建物、奈良時代の掘立柱建物、焼土坑、中世(11c溝、13c土坑墓、15c掘立柱建物)	876
5	2005	110	小学校校舎増築	弥生中～後期と奈良時代の集落(掘立柱建物、溝、鉄滓)	930
6	2008	275	小学校校舎増築	旧石器、縄文時代石獣、弥生時代中～後期の堅穴住居、井戸、奈良時代の掘立柱建物、土坑、鉄滓(製鍊、鍛冶)	1075(本吉)



Fig. 2 コノリ遺跡群の調査地点 (1/5000)

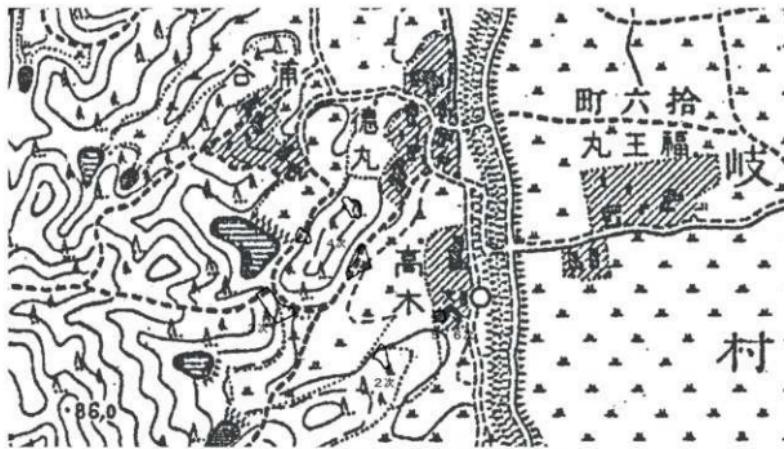


Fig. 3 明治33年の地形と調査地点 (1/8000)

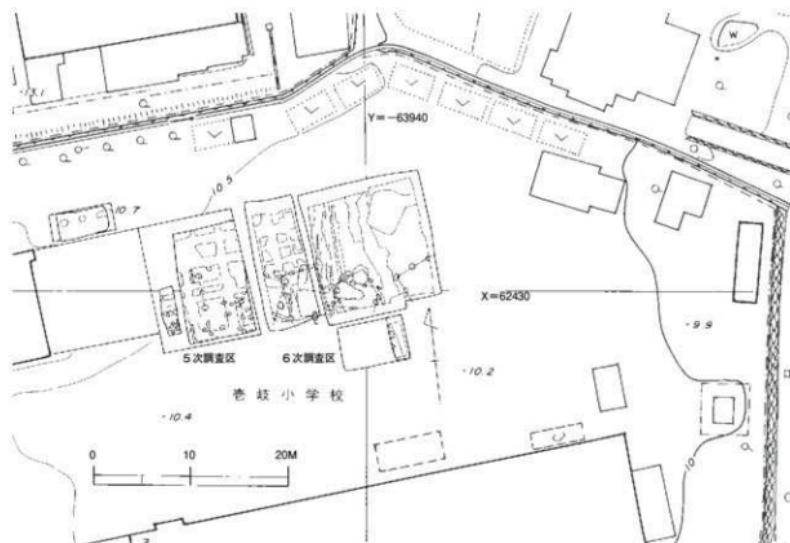


Fig. 4 塚ヶ崎小学校内の調査 (1/500)

設のコンクリート水路があったが、撤去せずに作業通路や排水路として用いることにした。12日に反転を行って、4区の表土剥ぎと2区南の拡張を行った。1区はその大部分で表土下に厚いコンクリート基礎が入っており、そのままでは調査不可能であった。12日の反転の際にコンクリート基礎の東隣に南北方向のトレーニングを入れ、谷斜面とピットを検出、その日中に写真・実測を終えて埋め戻した。19日に再び、反転を行い、耐震工事用の作業通路となっていた5区の表土剥ぎを行った。20日には調査を終えて埋め戻した。

調査は後述する地山面または遺物包含層の上を表土として重機で掘削した。包含層を切る遺構があることは分かっていたが、検出が困難であるため、包含層を人力で掘削してから遺構検出を行った。

調査座標は調査区の形に合わせた任意のもので、この座標で周辺の測量も行い、道路地図に合成した。隣接する5次調査区との位置関係はFig.4の通りである。標高の測量には塚ヶ崎小学校内の下水道基準点（海拔9.5743m）を用いた。

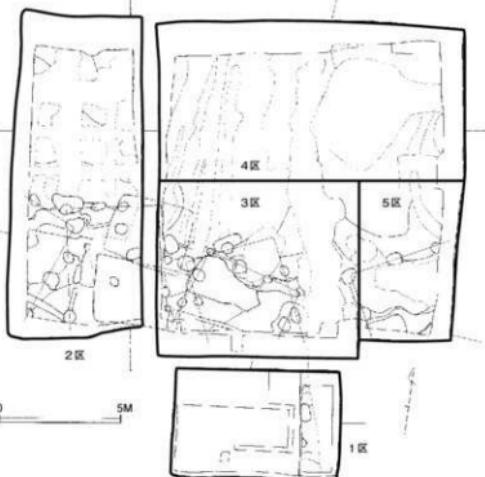


Fig. 5 第6次調査の区割り (1/200)



Fig. 6 調査区全体図 (1/80)

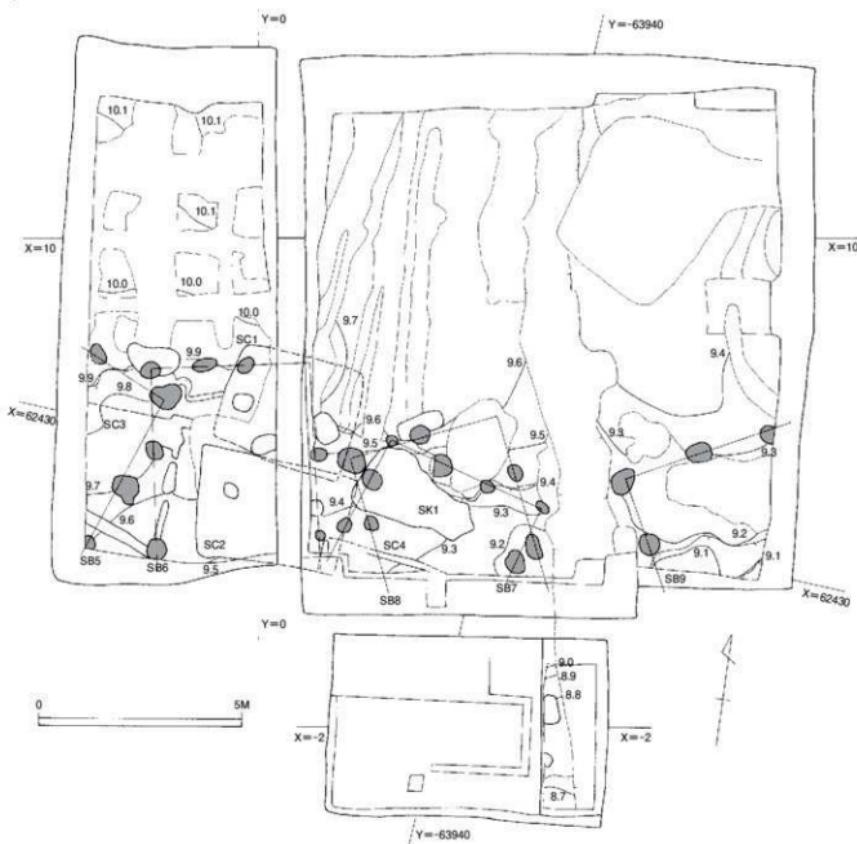


Fig. 7 第6次調査の主な遺構と等高線 (1/120)

#### IV. 調査の概要

6次調査区はコノリ遺跡群の東部で北東方向に伸びる丘陵先端付近の地点である。5次調査の後に建設された校舎の東隣りである。現況は小学校敷地で平坦である。地表下60~100cm前後の近現代盛土とその下層の灰褐色粘質土（地点により厚みが異なるが近世頃の水田層であろう）が表土層で、その下に古代の包含層または地山面がある（Fig. 8~10）。

調査区北側は丘陵尾根上とみられるが、昔の校地の造成や校舎建設にともなう削平や搅乱が著しく、包含層や遺構はほとんど消失している。調査区南側の斜面部を中心に包含層や遺構を検出した。地山は、削平の著しい調査区北側では赤く風化したいわゆるバイラン土で、南側の斜面では灰色土混じりの暗黄褐色シルトが主体となっている。標高は8.7m~10.1m前後を測る（Fig. 7）。

弥生時代の遺構覆土、古代の遺構覆土、古代に形成されたと考えられる包含層、いずれも暗褐色シルトを主体としており、土質から時代を判断するのは難しい。「包含層」は遺構の多い2・3・5区南部を中心に広がっており、古代の遺構覆土を含むものである。地形的に谷側になる調査区南端の1

区の方では、遺構が散在するものの、この「包含層」に相当する層はみられなかった。

主な遺構は弥生時代中～後期の堅穴住居や井戸、奈良時代前後の掘立柱建物や土坑などである。調査区南側の遺構密度は高く、削平された調査区北部にかけて本来は弥生時代や奈良時代の一大集落を形成していたものと考えられる。遺物は弥生土器を中心にコンテナケース10箱ほど出土した。弥生土器のはか、旧石器、縄文時代の石器、晩期の土器、奈良時代前後の須恵器、土師器、鉄滓などが出土している。

## V. 弥生時代の遺構

中期後半の井戸1基、中期後半～後期前半の（堅穴）住居址4軒以上などがある。本調査区の掘立柱建物はいずれも古代で、弥生時代のものはない可能性が高いと考えている。

### 1. 井戸（SK1）(Fig.11)

3区でみつかった遺構で、東西長3.2m、南北長1.7m、深さ0.95mを測る。古代の掘立柱建物SB7の柱穴などに

切られている。遺構の北側や東側を中心に複数のステップを有する。地山壁は漸移的であるが、下部ほど色調が明るく粘性が高くなり、湧水があるので、井戸と考える。覆土は淡い暗褐色シルトが主体で、自然埋没であろう。遺物は埋没過程で投棄されたとみられる中期後半を中心とする弥生土器片や黒曜石片が出土している(Fig.19)。出土土器には時期幅があるが、層位に対応する時期差は見出しづらい。遺構の時期は須玖I式新段階～II式古段階である。

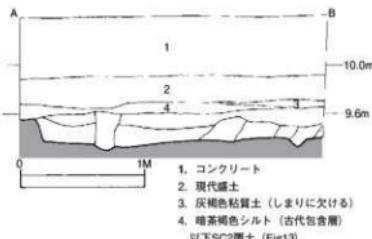


Fig. 8 AB Line Soil Profile (Zone 2 SC2 near SK2 1/40)



Fig. 9 CD Line Soil Profile (Zone 3 SK1 near SK1 1/40)

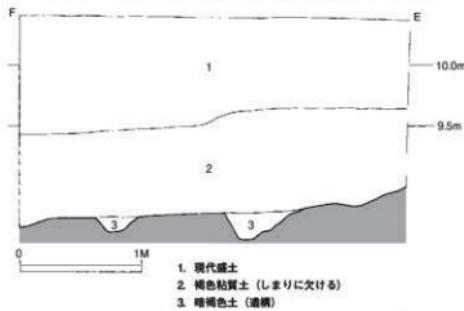


Fig. 10 EF Line Soil Profile (Zone 1 1/40)

## 2. 積穴住居址

### ① SC 1 (Fig.12)

2区から3区にまたがってみつかった住居址でSC 2の北に位置する。積穴の立ち上がりは北西部しか遺存しておらず、2本主柱 (SP26・49) と壁際土坑 (SP47) からの復元で、一辺3m前後の小型方形住居と考えられる。主柱間には深い溝や土坑がある。貼床面をおさえることができなかつたが、おそらく貼床の下で柱穴同士が溝で連結するタイプであろう。

出土遺物は少量である。SP26よりFig.20-6~8、SP25より5、SP47より21~24が出土している。土器に時期幅があるが、5・6から中期末（須須Ⅱ式新段階）前後と考えられる。

### ② SC 2 (Fig.13)

2区から3区にまたがってみつかった住居址でSC 1の南に位置する。西の2区側にのみ積穴住居の立ち上がりが遺存している。SP29、SP80を主柱とする2本柱の積穴住居で、約4m×2.7mの長方形住居と考えられる。南側には地山の段と盛土によるベッド状遺構がある（平面図は地山の段のライン、盛土は6~10層）。住居の覆土は4層で、5層が貼床と考えられる。SP83・86は住居掘り方にともなうものか、住居に先行する土坑か定かではない。

出土遺物は少量である、積穴の掘り方内 (44) からFig.20-19・20が、SP29より9が、SP72より25が、SP84より26が出土している。土器に時期幅があるが、9や25から、後期初頭前後と考えられる。

### ③ SC 3 (Fig.14左)

2区の積穴住居の壁溝と考えられる71、73、93などに囲まれる南北3m以上、東西2.5m以上の範囲をSC 3と捉えている。この北東より東に伸びる溝や深い落ち込みの70、北西から南東に伸びる201などから、3軒以上の住居が重複している可能性も考えられる。

70からはFig.20-29が、201からは33の土器が出土している。前者は中期前半、後者は終末期のV様式系土器であり、土器から時期を決めるのは難しい。遺構は4次調査でみつかっている弥生時代後

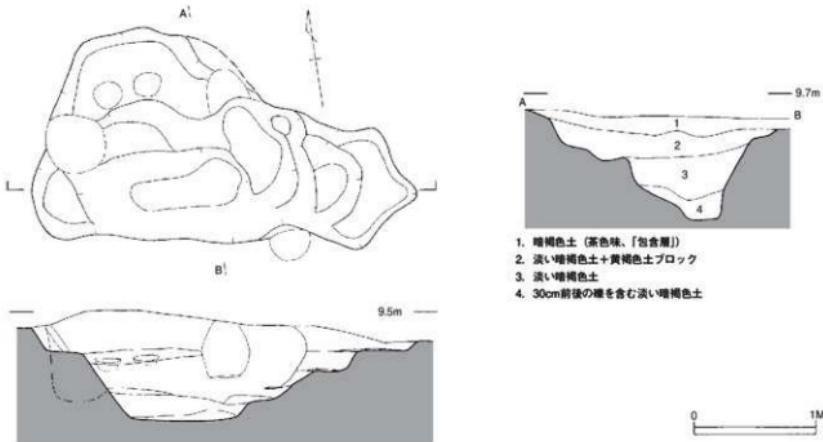


Fig.11 SK 1 実測図 (1/40)

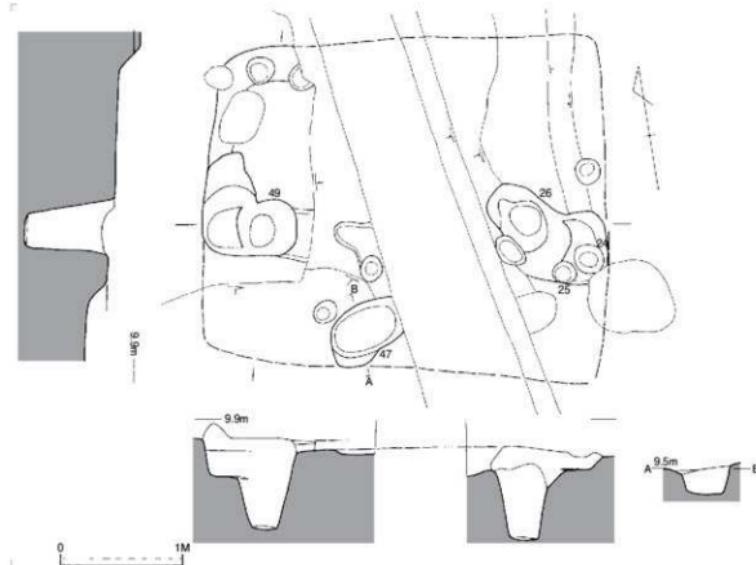


Fig.12 SC 1 実測図 (1/40)

期の方形住居と類似している。

小溝の201がSC 3と重複する別の住居の壁溝であるなら、終末期の住居が存在することになるが、当該期の遺物は33のみであり、他の弥生土器とは連続しない時期でもあるので、その可能性は薄いと考える。

#### ④ SC 4 (Fig.14右)

3区の竪穴住居の壁溝と考えられる34と37で囲まれる範囲をSC 4と捉えている。東西2.2m以上の方形住居と考えられる。溝から出土した遺物は極少量で、時期の特定は難しい。

## VI. 古代の遺構

### 1. 掘立柱建物

多数分布するピットは径60cm前後、深さ50cm前後のものが多い。このうち建物を復元できたのは以下の5軒である。いずれも調査後の整理作業において抽出できたものである。出土遺物は少量であり、時期の特定が困難であるが、いずれの建物も須恵器がある段階のものであり、本調査区の遺物組成からみて奈良時代前後と考えられる。

調査区の端にかかるものが多く、建物全体を検出したものはないが、いずれも一般的な規模の側柱建物とみられる。斜面上に立地しており、標高の低い南側のピットがより深い傾向にある。建物の軸方向は、SB 5がSB 7と、SB 8がSB 9と近い関係にある。

#### ① SB 5 (Fig.15上)

2区南西の南北4.2m以上、東西2.2m以上の側柱建物である。南北方向のピット列はSP52、68、

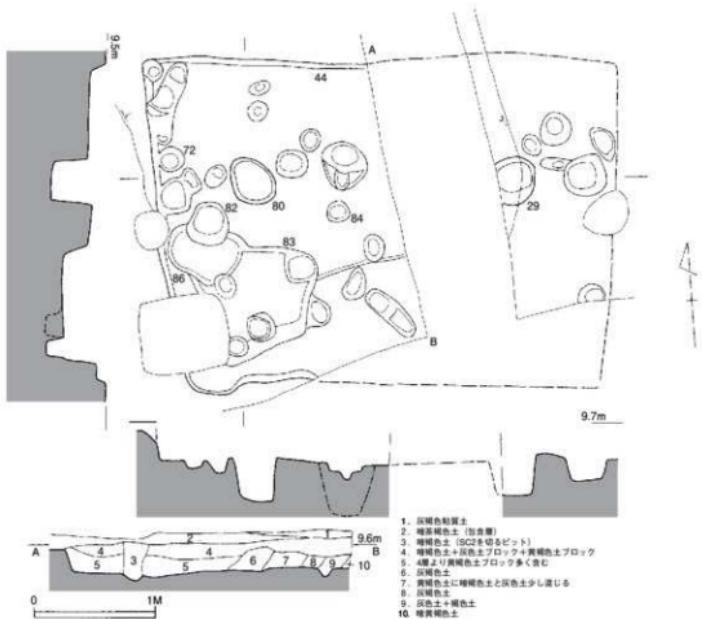


Fig.13 SC 2 実測図 (1/40)

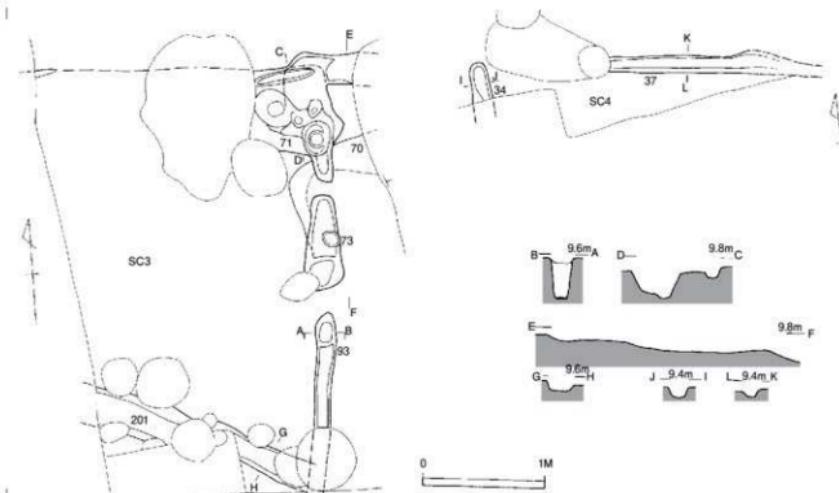


Fig.14 SC 3、4 実測図 (1/40)

205以外はSB 5に伴うものではないかもしれない。柱痕は検出していないが、ピット下段の掘り込みから柱径20cm前後とみられる。柱間はSP52と56の間が1.9mを測る。建物の方向は磁北より20°東に振れ、SB 7に近い。

SP52からFig.21-7・8が、SP68から10が出土している。いずれも小片であるが、蓋の型式から、8世紀前半でも後後に近い段階以降のものとみられる。

#### ② SB 6 (Fig.16)

2区から3区にまたがる東西約3.9m、南北4.8m以上の側柱建物である。南北方向の柱間は2~2.4m、東西方向は1.1mである。建物の方向は磁北より9°西に振れている。

ピット出土遺物は少量の弥生土器、土師器、須恵器であるが、図化できるのは弥生土器のみであった。

#### ③ SB 7 (Fig.15下)

3区のSB 8と重複する位置にあるが、前後関係は不明である。東西3間で約4m、南北2.4m以上の側柱建物である。柱間は1.2~1.4m前後である。建物の方向は磁北より15°東に振れ、SB 5に近い。

SP19よりFig.21-4が出土している。8世紀前半前後であろう。

#### ④ SB 8 (Fig.17上)

3区のSB 7と重複する位置にあるが、前後関係は不明である。東西2間で約3.8m、南北3間以上で4.2m以上の側柱建物である。柱間は1.6~1.9mである。建物の方向は磁北より26°西に振れ、SB 9に近い。

SP03・04よりFig.21-1が出土している。7世紀後半~8世紀初頭とみられる。

#### ⑤ SB 9 (Fig.17下)

調査区東端に位置する東西3.8m以上、南北2m以上の側柱建物である。柱間は1.8m前後である。建物の方向は磁北より28°西に振れ、SB 8に近い。

ピット出土遺物は少量の弥生土器、土師器、須恵器であるが、図化できるものはなかった。

## 2. 土坑 (216) (Fig.18)

5区の216は南北0.9m、東西0.7m、深さ0.2mの土坑で、覆土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

出土遺物は少量の須恵器、土師器 (Fig.21-12)、鉄滓である。鉄滓は楕形を含む鍛冶滓205gと製鍊滓25gである。製鍊滓と鍛冶滓が伴った唯一の遺構であるが、いずれも少量にすぎず、排滓坑のようなものとは考えにくい。

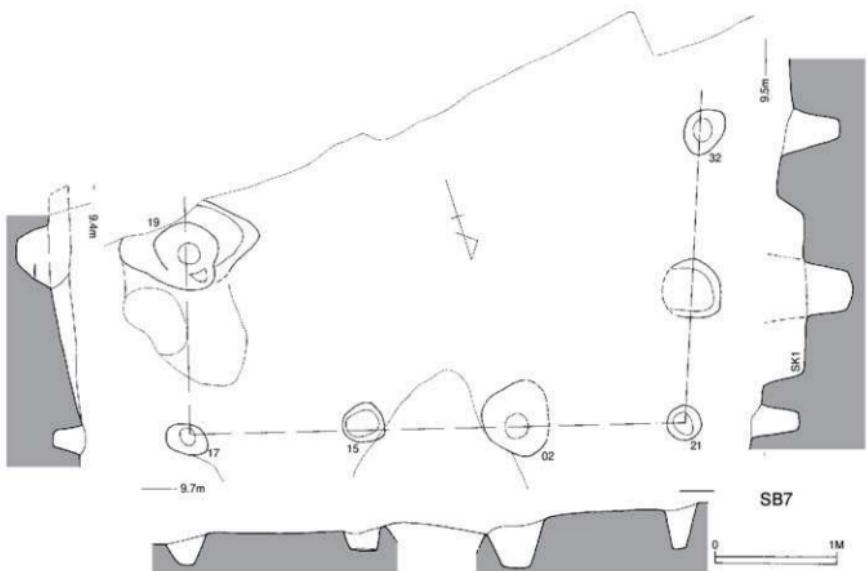
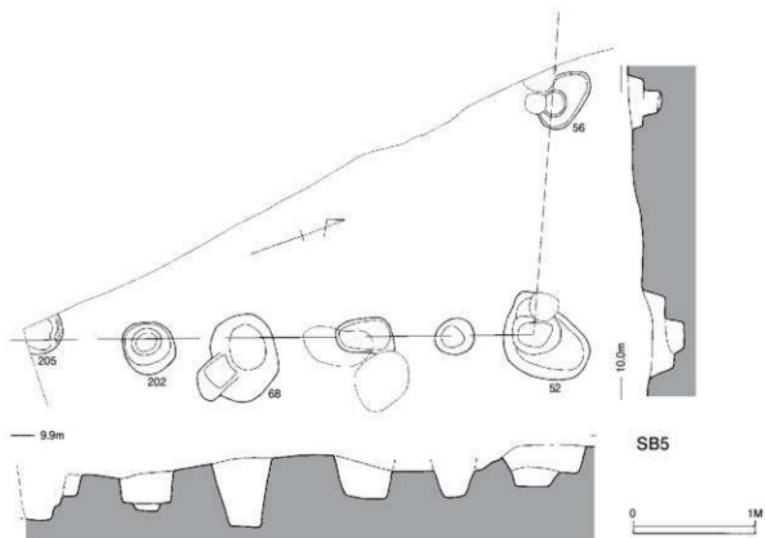


Fig.15 SB 5、7 実測図 (1/40)

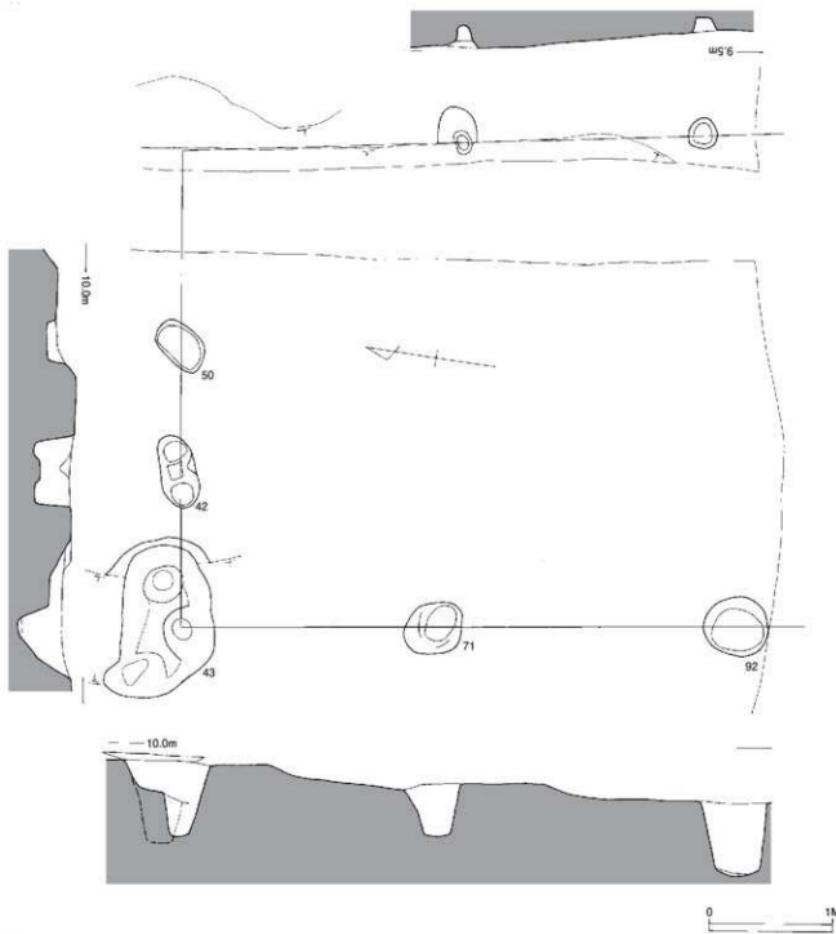


Fig.16 SB 6 実測図 (1/40)

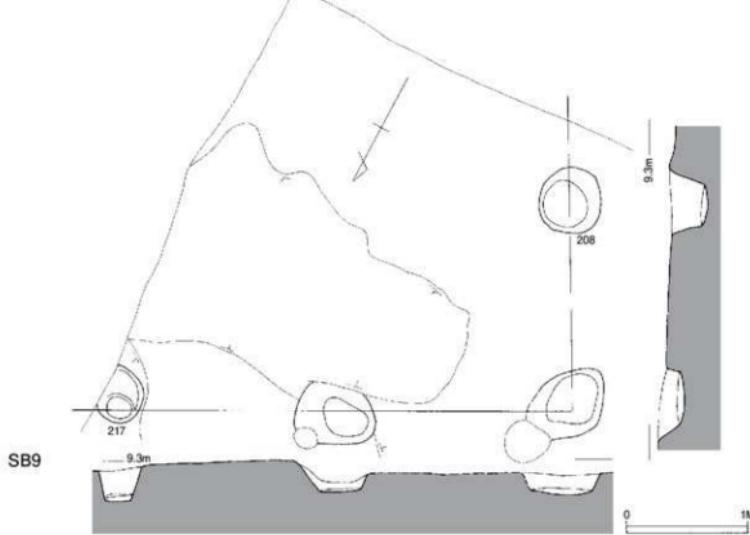
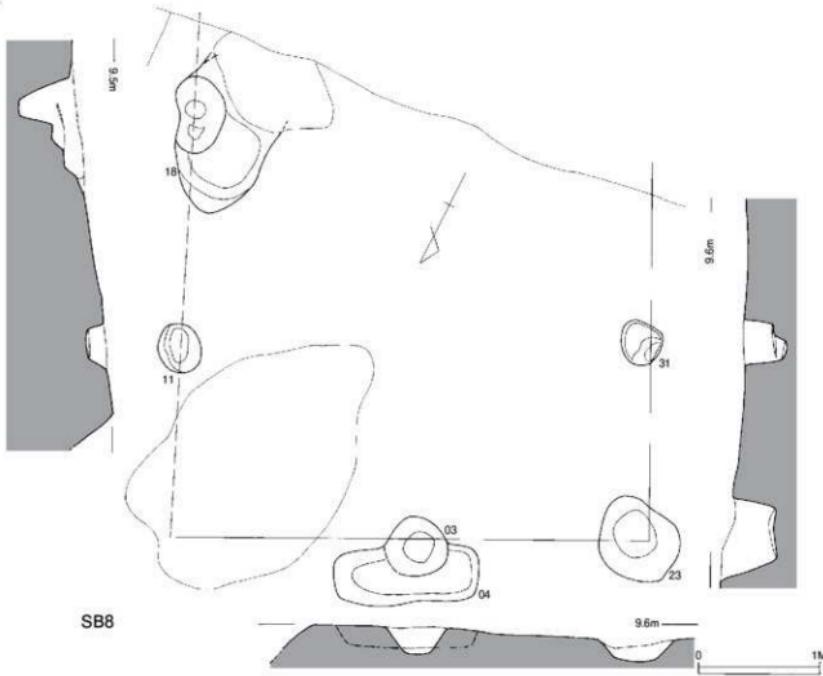


Fig.17 SB 8、9 実測図 (1/40)

## VII. 出土遺物

弥生土器を中心としてコンテナケース10箱ほどの出土量である。弥生土器のほか、旧石器時代から弥生時代までの石器、奈良時代前後の須恵器、土師器、鉄滓などが出土している。包含層からの出土が多く、遺構出土の遺物はSK 1以外少量である。弥生土器は器表の摩滅が進んでおり、器面調整や丹塗りの有無が判断できないものが多い。

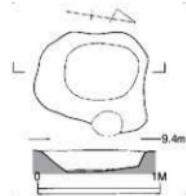


Fig.18 216実測図 (1/40)

### 1. SK 1 出土の弥生土器 (Fig.19)

1～5は鋤先口縁壺、6は屈折口縁壺、7は鋤先口縁広口壺、8～12は底部（主に壺）である。13・14は鋤先口縁高杯である。色調は淡橙色であるが、器表面が摩滅しており、丹塗りの有無は分からない。15・16は器台、17は支脚である。SK 1出土の土器群に特殊な土器は目立たず、破損した日常容器を廃棄したものと思われる。

12は縄文晩期の深鉢の底部である。混入遺物とみられるが、コノリ遺跡群では初例であり、貴重な資料である。11は弥生後期前半の壺または壺の底部であり、他の土器群よりは新しいが、この時期の土器はほとんど出土していない。

土器群の主たる時期は須玖I式の新段階で、一部II式の古段階を含むものとみられる。須玖I式新相の一括資料である博多遺跡群30次SC089出土の土器群と比べると、前段階的な厚底はみられず、6の屈折口縁壺のように、胴の張りが強く、突帯が頸部に接する位置まで上がっている型式がみられるので、より新しい様相がうかがえる土器群である。

### 2. SC、SP 出土の弥生土器 (Fig.20)

全体的にみて須玖I式新段階～II式の土器が多い。鋤先口縁壺（10・11・16・19・22・23・26・27）、屈折口縁壺（3・9・21）、鋤先口縁壺（14・30）、高杯（7・15・25）、支脚（4・8）などがみられ、壺底部はいずれも底面が凹面をなす平底であるが、厚手のもの（17・20・24・34）と薄手のもの（2・6・12・18）がある。

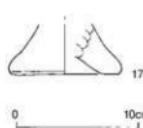
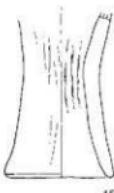
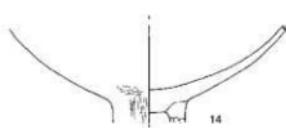
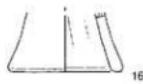
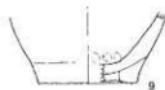
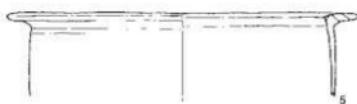
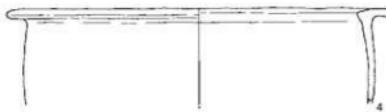
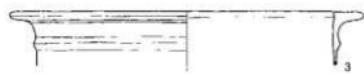
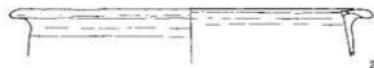
また、土器群の時期幅を示すものや特殊な土器としては次のようなものがある。29は須玖I式古段階以前に上がりうるもの、5の無頸壺は須玖II式新段階から後期前半まで下りうるもの、25は後期前半の鋤先口縁高杯の退化型式、33は薄い突出底でタキ調整が施されるV様式系壺底部で、終末期のものである。32は立岩式壺棺に相当する大壺の口縁部である。

SC出土土器についても時期幅がみられるが、遺構の帰属時期とその根拠となる土器については、遺構の報告で述べた通りである。須玖I式新段階からII式古段階は出土弥生土器の主たる時期であり、住居の存在が予想されるが、当該期の住居址を明示するのは難しい。抽出することのできた住居址（SC 1～4）は中期末から後期初頭前後のものとみられる。

### 3. SB、SP 出土の古代の土器 (Fig.21)

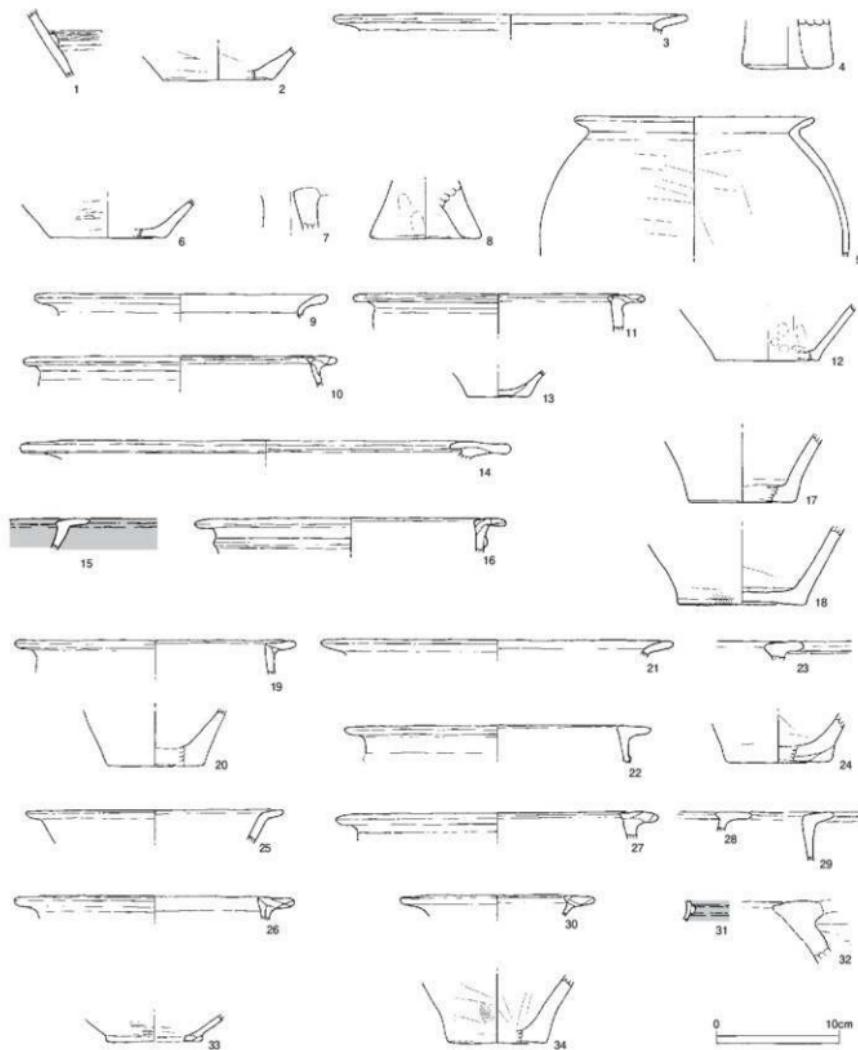
古代の土器は遺構出土のものは少なく、包含層からの出土が多いが、「包含層」としたものには、古代の遺構覆土が含まれている。ここでは、その出土遺構をおさえることのできた遺物について述べたい。

1～11が須恵器で、12が土師器である。蓋（1・6・7・8・9）のうち1は身受けのかえりを有



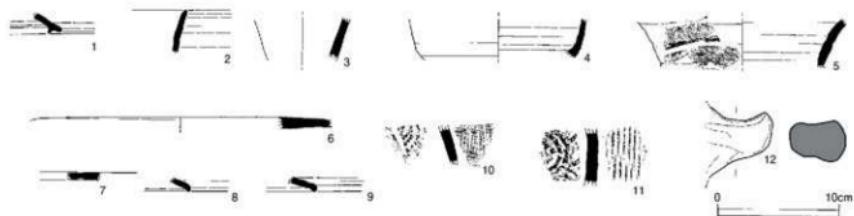
0 10cm

Fig.19 SK 1 出土の弥生土器 (1/4)



1 : SP02 (SB7) 混入 2 : SP16 3 ~ 4 : SP23 (SB8) 混入 5 : SP25 (SC1?) 6 ~ 8 : SP26 (SC1) 9 : SP29 (SC2) 10 : SP33  
 11 : SP38 (SC4より古) 12 : SP31 (SB8) 混入 13 : SP215混入 14 ~ 18 : SP43 (SB6) 混入 19 ~ 20 : SC2 21 ~ 24 : SP47 (SC1)  
 25 : SP72 (SC2?) 26 : SP84 (SC2?) 27 : SP58 28 : SP62 29 : SP70 (SC3より古) 30 ~ 31 : SP92 (SB6) 混入 32 : SP95  
 33 : SD201 34 : SP202 (SB5) 混入

Fig.20 各遺構出土の弥生土器 (1/4)



1: SP03・04 (SB8) 2・3: SP07 4: SP19 (SB7) 5: SP24~26上面 6: SP78 7・8: SP52 (SB5) 9: SP215 10: SP68 (SB5)  
11: SP211 12: SK216

Fig.21 各遺構出土の古代の土器 (1/4)

する7世紀後半に上りうる型式である。8・9は下方に突出する端面を有する奈良時代のものであるが、端面が小さく丸みをおびる8世紀後半段階のものである。2・4は奈良時代の杯身である。3は長頸壺の頸部である。5・10・11は壺である。5は櫛描波状文2段以上と凹線の区画を有する壺頭部で、概ね7世紀末までのものである。12は古墳時代後半～古代の土器の壺または鍋の把手である。

このような遺構出土の土器相からみて、古代の遺構は8世紀代の奈良時代を中心とするが、7世紀後半には集落形成がなされていたと考えられる。後述する包含層の古代の土器も概ねこの時期幅である。7世紀代の土器は小田富士雄氏の九州須恵器編年のVI期以降の段階のものである。

#### 4. 包含層と攢乱出土の土器 (Fig.22~24)

遺構が密集する2区南部や3区からの出土が多く、本来は古代の遺構覆土に含まれていたものが少くないであろう。

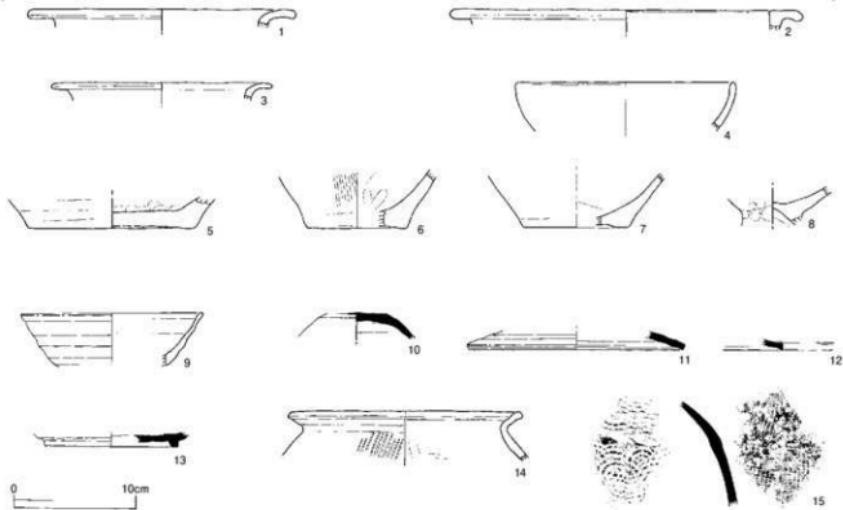


Fig.22 2区包含層出土の土器 (1/4)

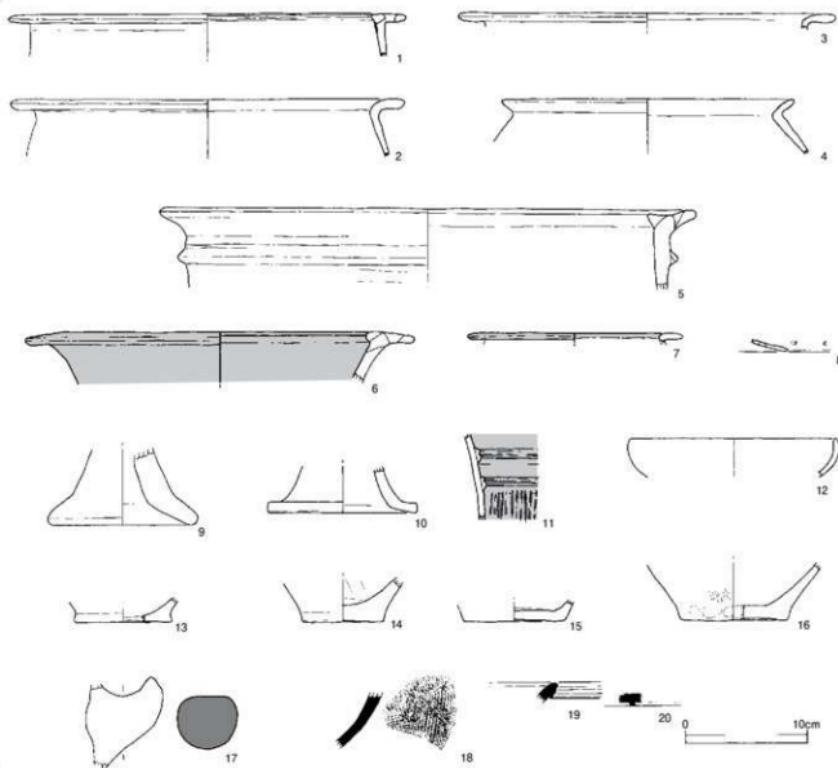


Fig.23 3区包含層出土の土器 (1/4)

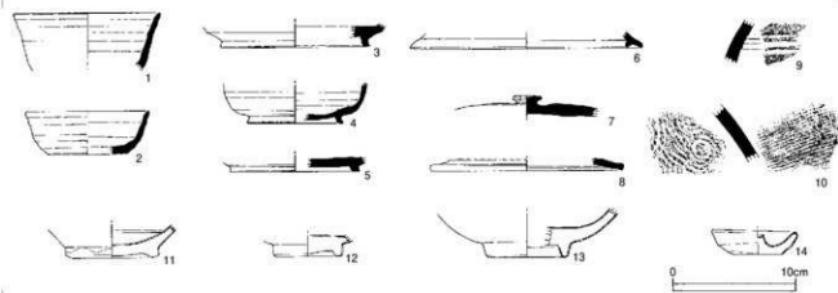


Fig.24 近世溝、搅乱等出土の土器・陶磁器 (1/4)

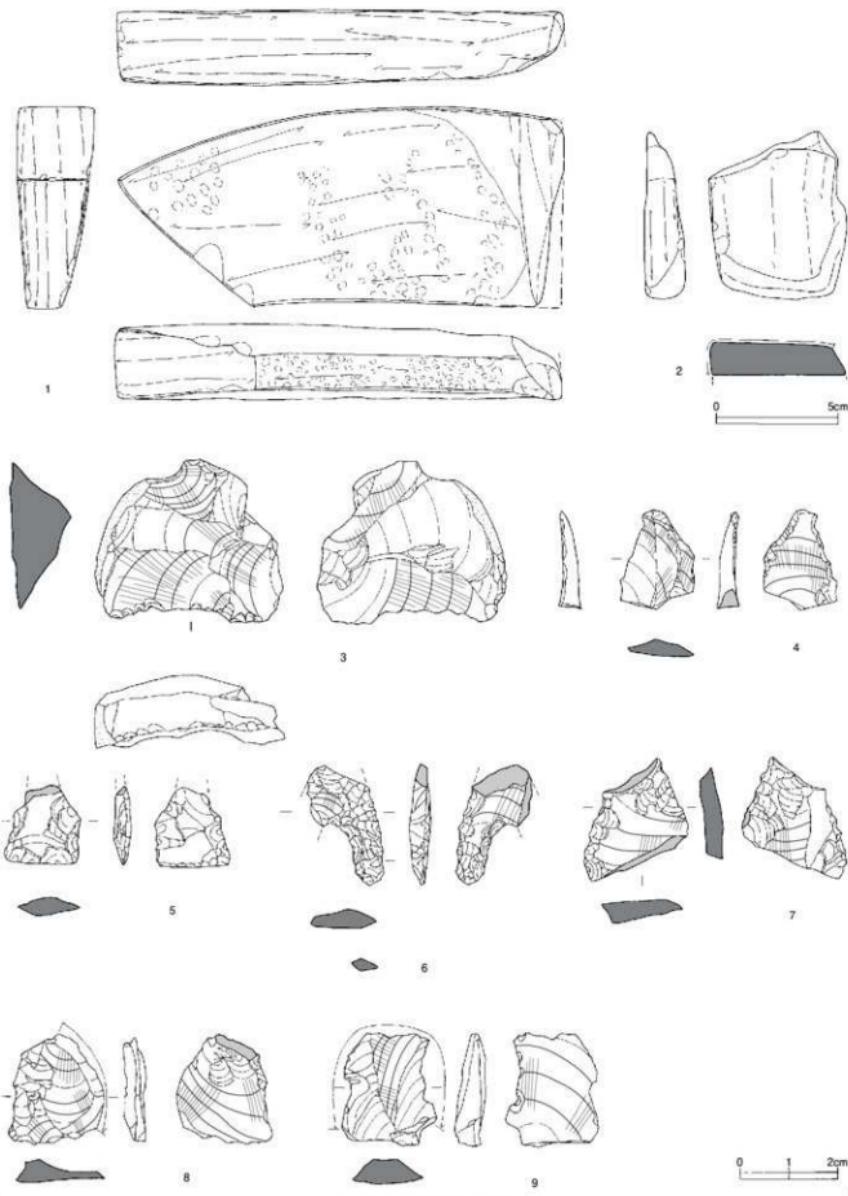


Fig.25 石器 (1/2, 1/1)

Fig.22-1～8は2区南部出土の弥生土器で、SC2周辺の地点が多い。須玖I式新段階～II式を中心とするものが多く、屈折口縁壺(1・3)、鋤先口縁壺(2)、底部(主に壺)(5～7)、鉢形(4)、脚台を有する壺または鉢(8)などがみられる。

Fig.22-9～15は2区南部出土の古代の土器である。SB5・6の周辺である。

9は土師器杯である。口縁部の開きが大きく、8世紀後半以降、9世紀まで下りうるものである。10はつまみのない須恵器蓋で、7世紀前半以前に上がるものかもしれない。11・12は須恵器蓋、13は須恵器杯の高台であり、8世紀のものである。14は短い「く」字口縁の土師器壺である。胎土は9の土師器杯と類似しており、シャモットを多く含む。口縁部内外面が強い回転ナデ、体部に縱方向の平行タキ目が施される。15は須恵器壺体部である。

Fig.23-1～16は3区出土弥生土器である。4は胎土が精良で、Fig.20-5と同じような無頸壺である。5は口縁部が内湾気味で、内面に突起状の稜線を有するタイプの壺である。須玖II式段階のものであろう。12は袋口縁壺である。口径が大きく、後期初頭に下るものである。13は縄文晚期深鉢系統の底部であろう。他は須玖II式前後の一般的なもので、鋤先口縁壺(1)、屈折口縁壺(2・3)、丹塗りの鋤先口縁広口壺(6)、丹塗りの無頸壺(7)、蓋(8)、暗文を有する丹塗り壺(11)、高杯脚部(10)、支脚脚部(9)などがみられる。

Fig.23-17～20は3区出土の古代の土器である。17は土師器の瓶または鍋の把手、18は須恵器壺体部、19は須恵器壺口縁、20は須恵器杯の高台である。

Fig.24は表土や搅乱出土遺物である。主に須恵器を抽出しているが、遺構出土品より遺存の良いものが少くない。1～10は古代の須恵器である。3・4・6・9は7世紀後半段階で、他は8世紀代のものであろう。11～14は中世後半～近世の陶磁器である。11は淡青色の釉薬が施された雜釉陶器風の高台付椀で国産の陶器類、12・13は明代以降の青磁高台付椀、14は黄緑色の釉薬が施された燭台である。

## 5. 石器 (Fig.25)

1は柱状片刃石斧形の異形石器である。2区南の包含層出土でシルト岩製、長さ18.3cmである。刃部周辺には擦り切り技法によるものとみられる溝・段状の痕跡がある。敲打後に全面を研磨するが、刃部の上面と下面を特に丁寧に研磨している。幅と長さに比べて、縱方向の厚みがあり、扁平な印象を受ける。その形状から利器としての機能は疑わしい。2は3区東の表土より出土した割り石を利用した砂岩製砥石である。被熱により赤変している。3・4は黒曜石の旧石器である。前者はSP65混入で牟田産の円礫を加工したスクレーバー、後者はSP42混入のナイフ形石器である。5・6は2区南包含層出土の縄文時代後・晩期の石鏃で、前者はサスカイト製五角形鏃、後者は腰岳黒曜石製の無茎鏃である。7はSP23出土で、黒曜石の石鏃側縁の破面を再調整して刃部としたスクレーバーである。8・9は弥生時代の不定形な黒曜石剥片石器スクレーバーである。前者がSP04出土、後者がSP45出土である。

この他に図化していないが、旧石器の黒曜石剥片1点、縄文時代のサスカイト剥片1点、今山産玄武岩製の石斧片4点、弥生時代の黒曜石製剥片石器・石核が109点317g出土している。

## 6. 鉄滓 (Ph.15～17)

本調査区から出土した製鉄関係遺物は鍛冶滓2575g、製鍊滓1480g、炉壁(製鍊炉)290gである。土壤採集を行っていないので、微細遺物は回収できていない。表土や搅乱からの出土が多く、掘立柱

建物ピットや土坑などの古代の遺構から出土するものは少量で、小さいものばかりである。包含層出土もあり多くはない。

特徴的なものを抽出し、PL6～7に写真を示した。左に配置した写真が炉内面または上側、右に配置した写真が外側または底面側である。断面や立面の写真はその見通し方向に配置している。以下の上下左右は炉内面側の写真についてである。F 1～F 5は製錬関係遺物である。F 1は炉底塊のコーナーを含むものである。3区東出土、890g。上と右は炉壁に接する部分で、右上の突起が流出孔溝である。炉底側は付着砂礫があまり多くない。F 2も炉底塊で炉壁の一辺に接する。3区東出土、185g。左にガラス化した炉壁が付着する。炉底側は砂礫が多く、炉底の灰白色粘土も付着している。F 3は炉底塊付近の小割溝である。4区出土、125g。F 4も小割溝で、メタルが残る。1区出土、70g。F 5は炉壁である。3区東出土、60g。炉壁はスサと砂礫混じりの灰色粘土で内側はガラス化している。F 6～F 8は椀形溝である。F 6は下が破面となっている。左から右方向に送風か。3区東出土、250g。F 7は下が破面となっている。送風方向はよく分からぬ。上面に鍛造剥片の付着がみられる。3区西出土。F 8は左上から右下方向に送風されたものか。上面に鍛造剥片の付着が、底面に木炭痕がみられる。3区東出土。

### VIII. まとめ

予想以上に遺構、遺物がみつかったことから、本調査区南部は壱岐小学校内では最も遺構の残りの良い箇所とみられる。遺構は弥生時代中期以降のものであるが、遺物には旧石器や縄文時代後・晩期の石鏃と石斧、縄文時代晩期系統の土器なども少数ながらみられる。

コノリ遺跡群東部の段丘斜面に位置する第6次調査地点周辺は、弥生時代中期中葉の須玖I式新段階に集落形成がはじまり、後期初頭～前葉にはその営みが一度停止する。住居・建物は竪穴住居を主体とし、戸戸状の土坑などもみつかっている。隣接する丘陵に位置する第4次調査地点では弥生時代後期全般の集落がみつかっているが、それに先行する集落形成とコノリ遺跡群内における弥生時代集落の変遷が明らかになった。

古墳時代の遺構と遺物はほとんどない。7世紀後半から8世紀代にかけて、掘立柱建物を主体とする集落が営まれるようになる。出土した製錬溝や鍛冶溝の多くもこの時期と考えられる。出土鉄溝の内容からみて付近で古代の製錬・鍛冶が行われていたことは確実である。関連する遺構や廃棄層がみつからないのは、それらが相対的に浅かったために後世の開発によって消失してしまったからであろう。古代の鉄溝や須恵器は表土層や擾乱から遺存の良いものが出土する傾向にある。鉄生産関係遺物は調査区全体から出土しているが、製錬に伴うものは3区が多く、2区は重量にして2%にすぎない。鍛冶は古代の集落域全域で行われていたが、製錬は東部の斜面を中心に行われていた可能性が考えられる。

平安時代以降の遺物の出土は少なく、近現代の造成までは田地として利用されたとみられる。

コノリ遺跡群は近現代の造成により遺跡の遺存状況が悪いが、本来は弥生時代中・後期と奈良時代前後の集落関連遺構の密度が高かった遺跡とみられる。古墳時代後期の群集墳や古代の製鉄関係の遺跡として知られてきたが、近年の調査では弥生時代中期から後期についても一大集落を形成していたことが明らかになってきた。

PL. 1



Ph. 1 全景（南から）



Ph. 2 2区・3区（南から）



Ph. 3 1区東部（東から）



Ph. 4 4区（西から）



Ph. 5 5区（西から）

PL. 3



Ph. 6 2区（南から）



Ph. 7 SC 2周辺（2区南拡張 西から）



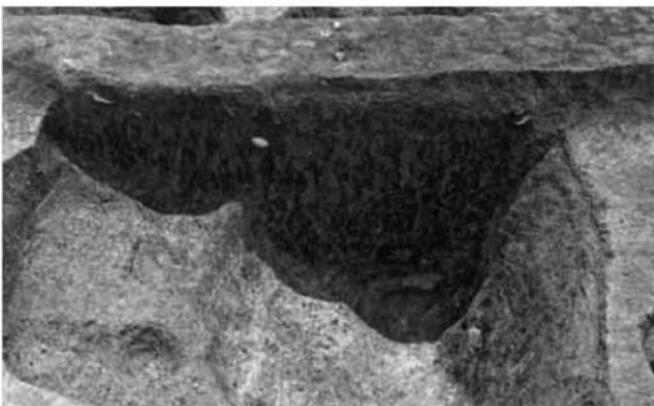
Ph. 8 SC 2土層（西から）



Ph. 9 3区（南西から）



Ph.10 SK1周辺包含層土層ベルト（東から）



Ph.11 SK1土層（西から）

PL. 5



19- 4



19-13



19- 6



19-14



19- 10



19- 8



19-15



19- 11



20- 18



20- 5

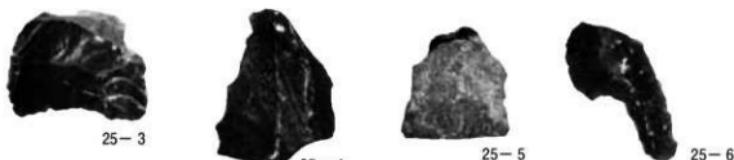
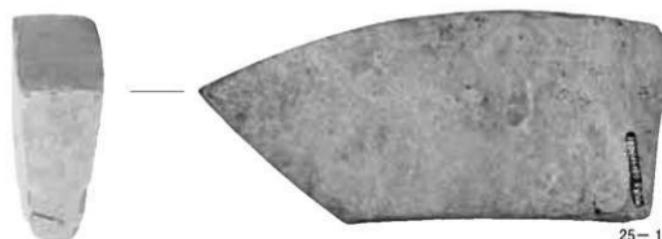


19- 12

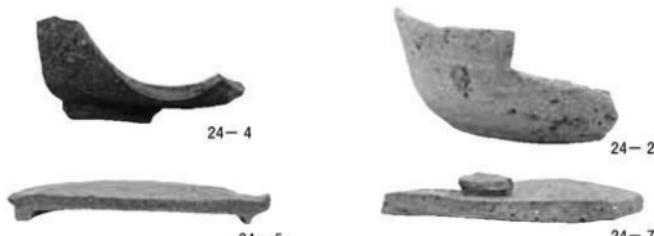


20- 33

Ph.12 弥生土器 (番号は挿図に対応)



Ph.13 石器（番号は挿図に対応）

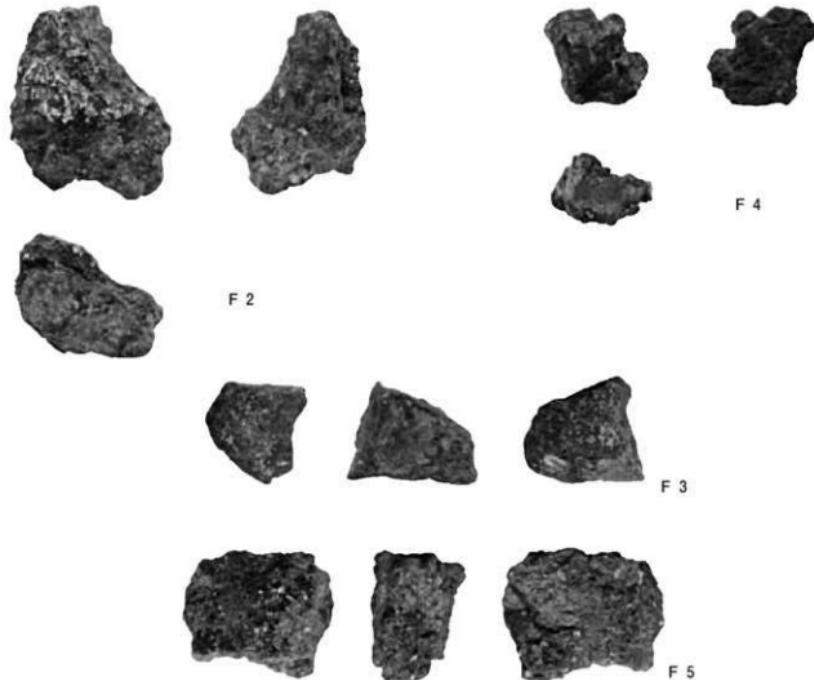


Ph.14 古代の須恵器（番号は挿図に対応）

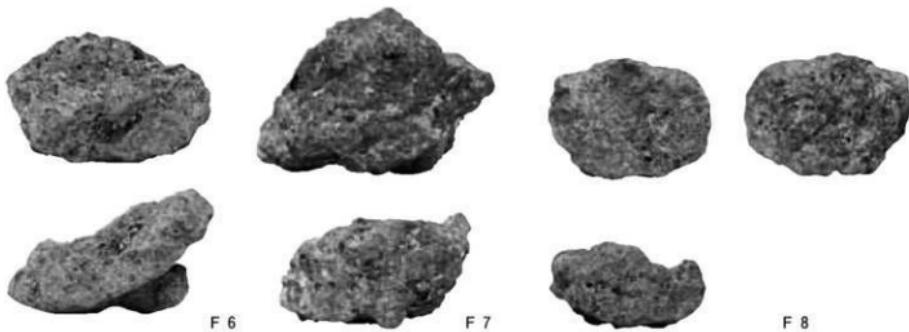


Ph.15 製鍊滓（約 1/2）

PL. 7



Ph.16 製鍊滓・炉壁 (約1/2)



Ph.17 鋼冶滓 (約1/2)

## 報告書抄録

書 名	コノリ遺跡群4							
ふりがな	このりいせきぐん4							
副書名	第6次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	シリーズ番号	第1075集					
編著者名	森本幹彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
発行機関	福岡市教育委員会							
発行年月日	2010年3月23日							
住所・電話番号	〒810-0001 福岡市中央区天神1・8-1 TEL092-711-4667							
遺跡名	コノリ遺跡群							
ふりがな	このりいせきぐん							
市町村コード	40130	遺跡番号	02831					
第6次調査								
地番	西区拾六町3-21-1	調査面積	275m <sup>2</sup>	調査原因	弥生時代中～後期の 堅穴住居址、井戸、 奈良時代前後の掘立 柱建物、土坑			
北緯	33° 33' 51.6"	東経	130° 18' 32.6"	小学校校舎増築	その他：旧石器、繩文時代石器、晚期土器、古代の鉄滓			
調査期間	2008.07.01～2008.07.20							
概要	<p>コノリ遺跡群東部の段丘斜面に位置する第6次調査地点では、弥生時代中期後半前後の堅穴住居や井戸がみつかり、後期を中心とする第4次調査区に先行する弥生時代集落の変遷が明らかになった。古墳時代の遺構と遺物はほとんどみられないが、奈良時代前後には多数の掘立柱建物が営まれる。表土や包含層などから出土した製鍊滓や鍛冶滓の多くもこの時期と考えられる。製鉄関連遺構はみつかっていないが、遺跡群内の広い範囲で古代の製鉄活動が行われていたことが明らかになった。</p> <p>コノリ遺跡群は近現代の造成により遺跡の遺存状況が悪いが、本来は弥生時代と古代を中心に集落関連遺構の密度が高かった遺跡とみられる。コノリ遺跡群は古墳時代後期の群集や古代の製鉄関係の遺跡として知られていたが、近年の調査では、弥生時代中期から後期についても一大集落を形成していたことが明らかになってきた。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1075集

コノリ遺跡群 4

- 第6次調査の報告 -

2010年（平成22年）3月23日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 高松印刷有限会社  
福岡市東区松島1-4-10